

冬の紳士

大佛次郎

光風社
版

冬　の　紳　士

検　印

昭和三十九年三月一日　印刷
昭和三十九年三月十五日　発行

定価　三三〇円

著　者　大　佛　次　郎
発行者　豊　島　清　史
印刷者　山　森　忠　一

発行所

株式会社　光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ四
電話東京（五）〇二三八番
振替東京　五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目 次

作 文
暖 炉
そ の 人
雨
小 さ い 事
夢
夜 の 一 場
晴 れ た 日

セ 二 三 四 五 六 七

鳩

一三

真面目な人達

一五

靴みがき

一六

ガード下

一七

肖像

一八

狂った人

二〇

台所

二二

死人に口無し

二四

装
幀

森
田
曠
平

冬
の
紳
士

作文

一

いろいろの雑誌の口絵の写真を撮って生活している青山正人^{まさひと}は夜更^{よふ}けてから半外套の襟を立てて新橋駅の壁に沿って銀座とは反対のガードの方へ歩いていた。秋も深くなっていて顔に冷たくあたる雨を感じて、目をあげると、いつものようにあたりの暗がりに、影のように立っている女たちが目についた。

光の明るい駅の玄関を通り抜けると、附近は暗い。ガード下の闇の中には、雨を避けたものでもなかるうが、殆ど、一列につながって彼女たちは立っていた。外套を着てすっきりとした形の女もいるが、和服で帯を結び、どこかの若夫人風に見えるものもある。目が会うと、白い顔で微笑して、寄添って来るような気配を示す女たちである。

その中のひとりが、なれなれしく側に寄って来たのに、正人は手を振って無駄だと合図して通り抜けた。仕事の上でストリップ・ショウの楽屋や、鳩の街などへ入って行くことが多いが、育ちがよかったせいも、遠慮がちにまだ人生に夢を持っていた。

「あの青年は、純粹でいいよ。年から言うところ、戦後派なんだが……」

と、エンジェルに集る常連の間でも認められていた。これは、マーケット街の中に小さく仕切られている粗末な飲屋であったが、雇われマダムが、古い雑誌の編集者の未亡人だったせいで、作家や画家や映画演劇関係の仕事をしている者で、それもあまり若くない客が自然と集るようになっていた。エンジェルに行けば、いつもの連中の誰れかが来ている、と分ってから、駅は近いし、梯子で飲む酒の仕上げに流れ込んで来るのである。

正人も、そこへ行くところであった。ネオン・ライトや赤い提灯が、光を撒き散らしている狭い路地に入ると、雨の音が屋根に高く成って来た。

断るまでもない、このバラック街の屋根は、どこもトタンが多い。雨の音には敏感なのである。曇り硝子をはめた戸が、エンジェルの店の内部を外から見えないようにしていたが、人間の立った目の高さに、一枚だけ硝子を外して、内が覗けるように成っていた。狭い店が満員と見とどけたら、常連でも他へ行って暫く待つか帰ることに成る。

それほど、この店は狭い。二坪ばかりしかないところに、おでんの鍋を置き、つまみ物を作る「台所」と、マダムの席があつて、それを白木の細長いカウンターの板で囲んで、客の椅子を土間に列

べてある。人が通るのには、腰かけている客に、一々、前に屈むか椅子を動かして貰わないといけない。

この店の客は、実に天使のようにおとなしく、この条件に服従していた。

「御免、通して下さい」

と、断らなくても、人が立つと、他の者が前に乗り出して、背中と後の壁との間に隙間を作る習慣である。そうしないのは、常連でない、ふりの客の店に慣れない者だ。それほどエンジェルの店は狭いし来る客の顔ぶれがきまっている。

二

正人が、その雨の晩に覗き穴から見ると、今降り出したばかりの雨のせいではないのは無論だろうが、いつもは雀押しに混んでいるのが、まばらに空いていて躊躇なく入ることが出来た。

もう、かなり酔っている顔見知りの映画のプロデュースや助監督に目顔で挨拶して、椅子にかけると、反対の隅の壁際に、ついぞ見たことがなかった洋装の若い女がいるのに気がついた。

「お酒」

と、マダムに注文してから、

「降って来ましたね」

「あいにくと」

マダムは、正人が入って来るのを見るなり、手廻しよくいつもの飲み物を支度したところであった。これは、熱燗の日本酒をコップで飲むのだった。

「青山君、青山君」

と、映画のプロデュースが、酔った調子で、自分の前に置いてあった半ピラの原稿用紙を手渡した。

「これを読んでくれ。僕の子供の作文だ」

「坊ちゃん？」

「うん、小学校の六年生だ」

連れが見て、皆で笑い出した。

「回覧板だな」

正人が受取って、それを読み始めると、「私の父」と題してあって、十行ほどの短い作文である。

私の父はお酒を飲んでは夜おそく帰って来ます　ひとりで何か　くどく話をして　いつまでも起きてます　世間のおとなは　みんな　こんなものかと僕は思いました　でも　お隣りの小父さんなどは　そうでありません　父は映画をこしらえたり本を書くひとです　いくら映画をこしらえたり本を書いても　父のように酒ばかり飲んでるのは悪いことだと僕は思います　母も時々心配しています。

「どうだ君？」

と、プロデュウサーは、酔った目もとを向けて、

「なかなかうまいだろう。オヤジを批判してるんだよ」

「坊ちゃんの作文を肴にして飲んでるんですか？」

「そうだよ。酒が、いつもよりうまいんだよ。小さいと思って油断していたら、いつの間にか、こんなものを書いて学校に出した。オヤジを吊るし上げにしてるんだよ」

「可愛いじゃないですか？」

プロデュウサーは、てれたように厚い近眼鏡をかけた目を正人から逸らしながら、また立続けに猪口の酒をあおった。

正人の酒も出ていた。いつも最初の酒がそれで、うれしそうにコップに口をつけて飲み始めると、
「どうしたんだろう？ この頃、『冬の紳士』を見ないね」

と、プロデュウサーが言い出した。

「来てるのかね？」

「いいえ、ずっと……お見えになりませんね。どこかへ御旅行か何かじゃアないんですか」と、啜えている煙草の煙の蔭から、マダムが答えた。

三

話に出た「冬の紳士」と言うのは、常連の中で詩を書いている男が言い出したことで、形容が何

となく合っていたので、いつの間にか、蔭でそう呼ぶことに成ったのだ。

第一に、その紳士の実名をマダムさえ知らない。これは、或る晩ふらりと入って来て、この店で飲んで出て行ったのが、ふりの客は、たいてい二度と来ないのが、どこが気に入ったのか、毎夜のように姿を見せることに成ったのである。もう五十に近い年配であろう。

常連とも顔馴染^{なじみ}となつて、一緒になれば挨拶を交すようになったのだが、どんな職業で、何と言うひとか、誰れも知らずにいる。たいていの常連は、お互いに話を聞いていれば、どんな仕事をしているか永い間には分つて了うものだが、この紳士は、いつも、ひとりで入って来て、静かに、ひとりで飲んで帰って行くので、

「何をしているひとだろう？」

と、問題にすることがあつても、訊き出す方法もなかった。

「名刺を出して、向うの名刺を貰ったら、すぐわかる」

と、小説を書いている男が言い出したが、正面切つて、そうするにしては、もう時期も経ち過ぎていたし、実際にそれまでにして相手の素性を知ろうとする者もいなかった。酒を飲み集めるのだが、皆、変に物にこだわらず、その場限り愉快に時を過ごせたら、それで満足する連中ばかりだった。

「まさか戦後派の成金じゃないだろう。顔がインテリだな、画家だと言っても通用するぜ」

「髯を生やしたら、キリストの顔に似そうだね」

と、映画の方の男が言った。

「いいマスクだぜ。役によつては、映画に出せるね。仏蘭西のルイ・ジュウベつて役どころだ。渋い顔だ」

その顔が、ひどく印象的だった。冬の紳士と言う呼び方も、これから出たのは輿論である。ああの線の強い、男らしい顔立は、めつたになかった。日本人ばなれした高い鼻筋に、くぼんでいる目が大きい。口もとても強くひき緊っている。が、これは顔の道具立のことだが、この紳士の一番深く人に印象を与えるのは、顔立ではなく、優しく見えるが、どこことなく暗く悲しんでいるように見える深い表情であらう。酔つて笑つた時も、淋しさが底に横たわっているような感じである。

「北方の海を見るような感じだね。暗い」

と、詩人が最初に言い出した。

「北欧の人間の顔に、あんなのがあるんじゃないか？ 明るくてもどこかに陰鬱なものが見える。

好い顔だ。卑しくないのがいい」

「ミゼラブルのジャン・バルジャンか？」

「いや、そこまで甘くないね。渋いんだ。何の仕事をしていると、あんな顔付になるかね？」

「けれど、お話なんか穏やかで、ほんとうに優しい方ですわ」

と、マダムが言い出した。

「それに、どこことなくスマートでしょう」

「おれ達なんかよりね」

「ええ、そうですとも。洋服なんか構ってないようできて、崩れたようなところに、何と云うんでしよう、一度見たら忘れられない変な味があるわよ」

「危険だよ、マダム、危険だよ」

「まさか」

と笑って、

「とにかく、新興さんではないわね。過去のあるひと」

「冬の紳士だよ。北風のようなきびしいものを持つてる。つめたい色の冬の海を見て来たひとさ」

「では、君は何を見て来たひとだ？」

「オッチャンなら、春の海だ。ひねもす、のたりのたり哉なで」

まぜ返したが、その時から、冬の紳士と言う呼び方が常連の間に伝わった。少し洒落過ぎていて当らないと思われる名称も、名前に使って慣れて了うと、いつの間にか落着いて自然のように成るものだ。殊に酔っぱらいと言うのは例外なく幻想家に成るものだから。正人は、この店で冬の紳士と顔を合せている時、肖像写真を撮って見たいと考えたことがあった。だが、これは写真にするのに難しい顔だと思った。この顔にある憂鬱な影を捕えなければ、写真とは言えない。ところが、この顔を形作っている輪郭は、強くて鮮明で、微妙な陰影とは反対のものなのだから、レンズが裏切る心配があった。